

第六十二話 令和元年 十一月八日

【沼津兵学校<三> 留学生】

ご先祖さんが沼津兵学校と縁{ゆかり} あった拙者にとって
【沼津兵学校】は 語っておかねばならぬ明治維新の一隅である。

テストがない、宿題がないとのユニークな授業がなされていると、全国から先生や父兄の見学者が殺到する。

この現象の第一号が明治二年の沼津兵学校。

先に乃木希典が沼津兵学校への転校を希望したと記した。全国諸藩から、仇敵だった藩からも視察者、留学希望者が殺到した。

日本発上陸の輪転機もあり、西洋最先端の機器、学問があふれていた

「おとまりさん」でない、藩から推薦、藩きっての秀才の正規の留学生。

山形有朋、大村益次郎が訪れた明治四年ごろには七、八十名に。

福井・徳島・鳥羽・武生 {たけふ} (越前)・斗南 {となん} (陸奥)・山口・長府・柳川・備中高梁らの藩名がれ記録に残している。

留学生を一番多く留学させたのは、越前藩とも呼ばれた福井藩。戊辰戦争では官軍につく。

福井藩の留学生の「修行生規則」。質素儉約。休日以外は酒、外出禁止。国事批判は慎むなど。藩からの支給された学費は一ヵ月十両余り。

明治初年、一両一円とされたことから十両は十円ほどになる。明治三十年の小学校の教員、巡查の初任給は月に凡そ八〜九円ぐらい。三十年間の物価上昇率を考えれば教員、巡查の初任給の倍近いだろう。藩が留学生に藩(県)の将来を託していたかがわかる。

留学費が豊富な藩もあれば、そうでない藩もある。その中の一藩。斗南藩。

斗南藩はいまの青森むつ市。賊軍会津藩は領地を没収され、酷寒の地で再興を許された藩。

斗南藩士西川鐵次郎 {てつじろう} がいた。

鐵次郎、十六歳で白虎隊に。切腹は止められ、その後、越後を転戦。敗戦後、高田に幽閉。西川の家族は東京で謹慎。明治三年、斗南に移る。

鐵次郎は単身、沼津兵学校へ。衣食も足らず、教授の自宅に寄食した。

ほかに記録に残されいない正規の留学生でない者もいた。教授が自宅で開講した私塾に通う。教授は授業料を受け取らなかった。全国津々浦々、新しい時代に向かって燃えていた。

鐵次郎、頭取(校長)、西周の授業を受ける。西から官軍の門閥の壁を乗り越えるのは学問だと諭された。

小学生(旧制中学の年齢)から資業生{しゅぎょうせい}となり、翌年、東京へ。その後、東京大学法学部卒業。司法官となり、大審院判事、函館・長崎

の控訴院長を歴任。

賊軍会津藩の藩士たちは、勉学に勤しんだ。よい成績をとる。それしか未来は開かれなかった。その後輩たちに軍学でのし上がっていった山本五十六らが出た。

沼津兵学校の校則「徳川家兵学校掟書 {おきてがみ}」によると、進級は資業生→本業生→得業生の三段階。得業生は博士課程か。

開校当時は三〇〇から五〇〇名の暫定生徒が資業生への受験資格があり、年齢は一四歳から一八歳。だが、元陸軍士官から暫定生徒になった者は三〇歳未満とされた。中には妻子持ちもいた。

試験問題は、素読・手跡 {しゅせき}・算術・地理の四科。

素読は句読音訓を間違いなく朗読できたら合格。

手跡はテーマ作文。テーマその一「友人に西洋学を進むる書状」。その二「先鋒にあつて敵の一閃を破り得て本営の進軍を促す状」。その三「敵城を得るの後其土民に論告する文」とか。字の上手い下手は二の次。内容の深いものが合格。

算術、地理は小学の授業をしっかりと学んでおけば合格。

では資業生が卒業するに課せられた科目とは。

史書講義、英仏語のいずれか。数学、器械学、科学、物理学、図画、銃砲打方 {うちかた}、乗馬、操練。なかでも数学は、軍事技術の基本と重視された。

英仏原書を使つての授業であることは云うまでもない。

「沼津ノ生徒ハ挙世間ハスシテ数学ニ巧ナル者トナスニ至レリ」（日本教育史）

東京大学出身者が学会の主流になるまで沼津兵学校出身者が数学をリードした。